

# 大島紬の興亡

大正七年（一九一八）に作家・菊池寛が発表した『大島ができる話』というのを読んだことがある。

ある平凡な男性が、東京高等商業学校（のちの一橋大学）を出て、社会人となり、結婚して子供が生まれる——そうした当時の、普通の人の暮らしぶりを、物心両面で支えてくれた恩人から始め、描いた短編であったが、その中に、「男は大島に限るわ」という妻の言葉が出てくる。この頃も今と変わらず、大島紬は一つのステータスであったようだ。

もつとも、主人公が手に入れた大島は、恩人の残してくれた形見で、女物。それを男物に直すことになると、大島紬は女性にとつても、着物をもっている、ということ自体に大きな価値があったようだ。

ところが意外なことに、この大島紬は、明治四年（一八七二）七

月の薩摩置県まで、ほとんど日本人には知られていなかった。

江戸時代、わずかばかり、琉球紬にまざって、大坂で取引された程度であった。

なぜ、知られていなかったのか。薩摩藩が奄美大島を支配しており、貿易や金銭の流通が自由に行なわれていなかったからにほかならない。

しかし、世の中には、「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」という、「五経」の一・『易教』にある、言葉通りのことが起きるもののようなのだ。

意味は、わかりやすい。何事も窮すれば必ず変化が生じ、変化が起これば、必ず通じる道が生じるものだ、というのだが、まさにピンチはチャンス。それを地で行ったのが、大島紬の歴史であった。薩摩藩から解放された大島紬は、



笠利村仲金久（現・鹿児島県奄美市）

に永江伊栄温が現れ、能率のいい織機を開発したことで、明治三十年代、第一期の黄金時代を迎える。が、一方で粗製濫造が続出。模造品も生まれ、そのためかえって、大島紬の名声は失墜し、商品は暴落となるという危機を招いてしまう。

心ある同志は、同業組合の結成と、品質の向上をはかるために、厳格な検査体制を設けるが、当初、参加業者数が極端に少なく、この苦境は永遠に続くかと思われた。

だが、日露戦争の勃発により、戦費調達のため、「非常時特別税法」が公布され、織物に消費税が課税されることとなった。



## PROFILE 加来 耕三氏

奈良大学文学部研究員を経て、現在は大学・企業の講師を務めながら、歴史家・作家として、独自の史観に基づく著作活動を行っている。その他、専門知識を駆使し、時代考証はもちろんだ、テレビ・ラジオ番組で監修・構成・出演などを幅広く手がけている。

しかも、その方法として、組合の製品検査後に、税額を査定することとなり、組合に入らなければ、事実上、大島紬を扱えないようになった。

業者はあわてて、組合に加入。大島紬の高級織物としての名声を、天下にとどろかせることとなる。商いはみな同じ、ピンチはチャンスなのだ。（了）

